

# 北村透谷「二宮尊徳翁」研究

— その文章構造を中心に —

古 田 芳 江

## 一 はじめに

「二宮尊徳翁」は、透谷の初期・「女学雑誌」投稿期の作品の中で、印象深い語句が際立っている評論である（初出「女学雑誌」第二三九号、一八九一年一月二十八日）。それらの語句のうちのいくつかは、透谷文学の真髓との関連を予感できるようなものもある。これらは、文学者透谷の明確な個性を形成しはじめていたことを明かしていることではないのか、と筆者はかんがえている。

## 二 透谷文学真髓への予感

二宮尊徳という、一般に知られている人物像それ自体も、郷里の人物であるという視点から簡潔に描かれている、とも思う。また、透谷固有の、国際的な、あるいは先駆的視野か

ら、報徳講の開祖としての尊徳を、クエカー教の開祖であるジョージ・フォックスになぞらえて論じているという特徴も明らかに読み取れる。

透谷文学の真髓との関連を予感できる語または語句を、四例ほど挙げてみよう。

- A 説くところ談ずるところ一々其胸臆より発す……。
- B 独特の大信仰を有し天来の心内生によりて終生を犠牲的に職事し……。
- C ……其の真摯着実清廉勇猛なる天資が轉軻崎嶇たる人生の行路に遭ひて恰も奇代の名琴が烈々たる荒颯に撥かれて自然に逸韻妙響を發し、聴かるゝ事なく称せらるゝ事なく自ら鳴いて自ら絶へたるが如きなるか。
- D 彼の英国の奇俊ジオルヂ、フォックス、を激称せしサルト、レザルトスの記者今日若し有らば必ず疾呼して

尊徳翁を英雄の一人に数ふるなる可し（傍線は引用者、以下も同じ）。

以上の四例について傍線を付した語に関連する内容を、深く立ち入ることはせずに、簡単に要点だけを述べてみることにする。

用例Aの、〈胸臆〉という語は、心または内部精神などに類似する語で、透谷の愛用語の一つである。〈胸臆〉の類義語には、「心機妙変を論ず」（『女学雑誌』第三二八号、一八九二年九月二四日）に〈胸臆〉という語がある。「各人心宮内の秘宮」（『平和』第六号、一八九二年九月一五日）では、比喩的に用いている用例がある。〈心に宮あり、宮の奥に他の秘宮あり〉という〈秘宮〉、ないしは〈第一の宮〉の奥にあるとする〈第二の宮〉などである。

用例Bの〈心内生〉は、「内部生命論」（『文学界』第五号、一八九三年五月三一日）で論じている〈根本の生命〉、〈内部の生命〉などの最初の形であることは、早くから論及されており、周知のことである。

用例Cの、〈奇代の名琴〉は、明喩の用法である。特定の楽器に限定せずに、〈自然に逸韻妙響を發〉するといふ〈音楽〉であることに注目して読むことが適切である。「二宮尊徳翁」を発表する以前に、透谷は、『蓬萊曲』（養真堂、一八

九一年五月）を出版している。その「第二齣第一場蓬萊原之一」詩行との関連もあると思う。明らかに類想であることが感じられる部分を一行ほど引用してみよう。（空中に唱歌の声あり）／あらあやしむれより送るぞ妙なる声、／此方の森の千代の松、風に浮かれて／歌ひ出るか、／彼方の雪の巖間より落る雪解の／水音が、わが琵琶の音を浮べて／自然なる歌曲よむか。／左なく天津乙女が降り来て虚空よりもたらず天歌かも。／歌へかし！ 歌へかし！／さてわが琵琶を合せてん）。

更に、「万物の声と詩人」（『評論』第一四号、一八九三年一〇月七日）に、隠喩として描かれている〈宇宙の中央〉に在るといふ〈無絃の大琴〉の、〈万物の情、万物の心〉すべてを〈音〉とするといふ詩想観へも移行している。

Dについては、〈英雄〉という語をとりあげることにする。

この語は、イギリスの思想家・歴史家であるトマス・カーライル（T. Carlyle, 1795-1881）著『英雄論』（Heroes and Hero-Worship, 1841）の中で論じられている〈英雄〉観に拠った用法である。筆者は、〈英雄〉と〈自然〉とは、透谷が、カーライル思想から受容した最重要語である、とかがえている。

〈英雄〉という語は、透谷最初の評論「日本の言語」を読む（『女学雑誌』第一七〇号、一八八九年七月一三日）の中で、つぎのように用いている。

余は日本の言語の多くの不完全なる所を見るなり、文学世界に一英雄の起りて我用語の爲に尽す所あれかしと望めること久し、

要するに、透谷は文学語学の發展に寄与する「英雄」の出現を望んでいるというのである。「久し」ということばから、透谷がカーライルに親しんでいた、ということも感じ取つてよいと思う。二番目の評論「当世文学の潮模様」(『女学雑誌』第一九四号、一八九〇年一月一日)では、カーライルの名前を挙げたうえで、「文豪」としての「英雄」について、つぎのように言う。

嗚呼少年の才子よ、文学の真味茲にあらず、天下大に公等を待つ所あり、放縦に誤る勿れ望長き文豪よ君が世界は今代にあらずして未来の他の時代であり、君が名譽と權威とは跼蹐として少数婦人の間にも、一代衆盲の中にもなくして無限無際涯たる未来にあり。カーライルは君が確かに未来に於る英雄の第一級に位ひす可を保証せり、兵馬の鬭争止みて平和なる筆頭の劇戦起は天も亦心して然らしめけん、

右の二例は、文学の英雄であるが、『英雄論』では、他の

分野の英雄も論じられている。カーライルのいう「英雄」は、「精神的な英雄」を意味しており、「偉人・聖人」と言い換えることもできる語である。『英雄論』から、いくらか引用することにする。「英雄」について、『英雄論』から三例ほど挙げてみよう。最初に挙げる一例は、いかにも超絶思想家(トランセンデンタリスト)だったエマソン(R. W. Emerson, 1803-1882)が共鳴した思想家であるカーライルらしい言い表し方である。換言すれば、透谷が、カーライルとエマソンとを思想的に、君主制と共和制との違いがあると指摘しつつも、思想上の「双児」(『エマソン』第五章・英雄論の序文・二六四頁)「民有社、一八九四年四月)である、と規定しているような意味での言い方である、と言うことも可能な言い表し方なのである。そのような思想世界における言説なのである。「英雄」という語の定義であると言えるような箇所を引用する。いまは、論証をせずに、ひとこと言い添えれば、この「英雄」観は、透谷の文章の中に、理想とする文学者の像として頻出する思想でもある。

Given your Hero, is he to become Conqueror, King,  
Philosopher, Poet? It is an inexplicably complex  
controversial-calculation between the world and him!

He will read the world and its laws; the world with its laws will be there to be read. What the world, on this matter, shall permit and bid is, as we said, the most important fact about the world. — (p. 80)

かりに、一英雄が与えられたとするなら、その人は征服者にならなければならぬのか。帝王か、哲学者か、それとも、詩人なのか。そこは世界とその人のあいだの、説明のしようもない複雑な論議のつきない問題である。英雄は世界とその法則を読みとり、世界はその法則と共に読みとられるために、そこにある。この点に關し、命ずることはすべて、まさに述べたように、世界に關する最も重要な事実である。—— (入江勇起男訳)

次に、同じ書の前置き部分から、「英雄」という語の意味を総括的に述べてある箇所を二例ほど引用する。「二宮尊徳翁」から読み取れる英雄としての尊徳像にはば重なる内容である。

For, as I take it, Universal History, the history of what man has accomplished in this world, is at bottom the History of the Great Men who have worked here. They were the leaders of men, these great ones; the modellers,

patterns, and in a wide sense creators, of whatsoever the general mass of men contrived to do or to attain; all things that we see standing accomplished in the world are properly the outer material result, the practical realisation and embodiment, of Thoughts that dwell in the Great Men sent into the world: the soul of the whole world's history, it may justly be considered, were the history of these. (p. 1)

というのは、わたくしの考えるところでは、世界史、すなわち人間がこの世で達成したいっさいの仕事の歴史は、根底において、この世ではたらいだ偉人の歴史であるからである。彼ら、かかる偉人たちは人間の指導者であったのだ。つまり、偉人は何事によらず、一般大衆のやり得たこと、遂行し得たことの原因作成者であり、手本であり、広い意味での創造者であった。すなわち、世界で達成されているすべてのものは、この世に送られた偉人に宿っていた思想の、まさに外的・物質的結果であり、現実的実現、具現である。全世界の歴史の神髄はそうした思想の歴史であると考へて差し支えあるまい。

(入江勇起男訳)

One comfort is, that Great Men, taken up in any way,

are profitable company. We cannot look, however imperfectly, upon a great man, without gaining something by him. He is the living light-fountain, which it is good and pleasant to be near. The light which enlightens, which has enlightened the darkness of the world; and this not as a kindled lamp only, but rather as a natural luminary shining by the gift of Heaven; a flowing light-fountain, as I say, of native original insight, of manhood and heroic nobleness; — in whose radiance all souls feel that it is well them. (pp. 1-2)

一つの慰めは、偉人はどんな方法で取上げても有益な伴侶となる、ということである。どんなに不完全な眺めかたをしても、わたくしどもは偉人から必ず何かを得るものである。それは生きた光の泉であつて、そばにいればためになり、楽しくもある。それは世の暗闇を照らし、また照らしてきた光である。これはたんにともされた灯火ではなく、むしろ天の賜物によつて生まれながらにして輝く発光体である。それはわたくしの言うように、生まれながらに備わっている独特の洞察力と勇氣と英雄的高潔さの湧き出る光の泉である、——その光を浴びるとき万人は身の幸いを覚えるのである。(入江勇起男訳)

右に挙げた「英雄」観を軸において、改めて「二宮尊徳翁」を読み返してみるならば、この論それ自体として、透谷は、尊徳を、英雄のひとりとして論じている、と読めるのではないだろうか。透谷の『全集』に、一貫して通底する文学観は、カーライルの言う意味での英雄精神に基づく文学である。透谷は、カーライルを、非常によく理解し共感を抱いていたからである。

### 三 「二宮尊徳翁」の文章の類別について

本研究の目的である文章の構造をかんがえる前に、この文章の類別に関する問題をとりあげることも必要のようである。筆者自身は、先にも書いているのだが、「評論」であるとかんがえている。

「女学雑誌」初出では、「二宮尊徳翁」という表題の頭に、「史伝」という記載がなされていた。勝本清一郎は、おそらくこれを踏まえたうえで「論文」である、と判断したのかとと思う。『透谷全集第一巻』（岩波書店、一九五〇年七月）の「解題」（四三〇頁）の中で、「ヘクエーカーイズムの思想の立場から尊徳を再認識しよう」としてこの論文を書いたのである」と説明している。そして、「発表年月順著作目録」（同全集第三巻、五六二頁）には、「評論」と記している。

さて、何が問題なのかと言うことだが、実は、本研究のテキストである小田切秀雄編『北村透谷集』では、「感想と雑文」という一群の文章の中に分類しているのである。同書の「解題」(三八五頁)には、(本集は、収録した作品の全部を、韻文・評論・感想と雑文・小説・研究・手記と書簡・日記という七類にわけ)てある、と説明している。勝本と小田切の、文章の種類分けの基準に関する直接的な言及はなされてはいない。

小田切秀雄は、勝本の、「発表年月順著作目録」等を、参照することはせずに、独自に文章の種類を分類しようである。小田切が、「感想と雑文」に入れている文章を、サンプルとして、発表年月順に、四例ほど取り上げて、その種類分けのありようを見よう。

表中の例は、小田切秀雄が、「感想と雑文」に分けている四作品だが、勝本清一郎の方では、「評論」と「感想」と

発表年月	作品名	勝本清一郎	小田切秀雄	参考例 平岡敏夫(3)
1891年1月	二宮尊徳翁	評論	感想と雑文	
1892年2月	鬼心非鬼心	感想	感想と雑文	感想と小説の間
1893年9月	思想の聖殿	評論	感想と雑文	
1893年11月	一夕観	感想	感想と雑文	

が、それぞれ二作品ずつとなっている。また、「鬼心非鬼心」については、平岡敏夫の「感想と小説の間」という論説もあり、透谷の文章の分類に関する再考の必要性を指摘している、という現象も見られる。

「一夕観」は、勝本と小田切との意見が、ほぼ一致しているように見えよう。ところが、「一夕観」を論じている論者一〇人について調査してみると、十人十色なのである。拙論の中から、部分的に引用して列挙してみよう。へ勝本清一郎「感想」・小田切秀雄「感想と雑文」・島崎藤村「随筆」・色川大吉「文章」・佐藤善也「作品」・藪楨子「評論」・中村完「思想的随想」・桶谷秀明「エッセイ」・平岡敏夫「随想」・水本精一郎「散文詩ともいえるような、比較的短い文章」・佐藤泰正「偶思・偶録のたぐい」<sup>(3)</sup>などである。このような現象も、同様に再考の必要を促していよう。

ここで、文章の種類分け方について、かんがえてみたい。「評論」というのは、一般に通用していて特に問題はないと思うが、「感想」という文章を、文章の一種類として特定することは、現在は、一般的ではないようである。「随想」という文章であるとしたほうが適切であると思う。

では、「随想」とは何か、これについては木原茂による明確な説明がある。この著書では、「随想」を、十六世紀のモンテーニュとペーコンとを起源とするフランス語と英語のエ

ツセイの訳語として説明をする。同書によれば、随想の特徴は、その材源が、へ生活のさまざまな様相や、自分自身の経験であるということとを、第一とするという。それらを、個人の内部の観点から、へ個人的な判断を述べたり、感情的な反応をのべたりする短い散文であるという。筆者はこの説明を、全的に受容したい。

「一夕観」は、勝本と小田切とに「感想」という共通項を見いだせた。しかし、そのまま「随想」であると置き換えてもよいのか、という問題はあろう。いまは、この問題を保留しておくことにする。

#### 四 「二宮尊徳翁」の文章構造について

「二宮尊徳翁」を、勝本は〔評論〕とし、小田切は〔感想と雑文〕の一群の中に入れてゐる。

本研究の目的は、「二宮尊徳翁」の文章構造を研究することであるが、この研究は、必然的に「二宮尊徳翁」の文章が、〔評論〕であるということを実証することにもなるであらう。

「二宮尊徳翁」の文章構造を研究するに際しては、筆者が、永尾章曹の研究成果に多大な恩恵を受けたことを特筆しておきたい。段落論・文章論についての基本軸は、これを土台とし、筆者が納得できた部分を応用したものである。なお、語・

語句等の多数を、永尾論文から断片的に引用させていただが、煩瑣になるので引用であることを示さない場合もあり、その場合に、筆者の地の文のなかに、そのまま引用させていただくことも、おことわりしておく。

「二宮尊徳翁」の文章は、形式上三つの段落に分けて記してある。段落の初めを一字空きにする形をとってはいない。段落の終りの改行によって示してある。各段落毎の文章の長さは、句読点も含めた文字数で表すと、第一段落は一九七文字・第二段落は三七五文字・第三段落は四一八二文字である。第一段落を1とすれば、第二段落は約2となり、第三段落は約22となる。それぞれの段落は、文章の構成単位として存在している。しかし、文章の構造を論理的にみるならば、それぞれの段落を、より小さい段落に分けることも可能である。例えば、第一段落は、短いではあるが、論理的にも文の質的違いのうえにも小さい単位に分けて読んだほうが適切なものである。形式的な三つの段落は、明らかにそれとしての表現意図に基づくものである。したがって、「二宮尊徳翁」本文の引用は、形式的な段落によるものとする。

段落を、三つの形式に従ってローマ数字で表して全文を引用する。また、後の記述の便宜のために文の順序に従って、文に番号をつけることにする。一文の終りについてはテキストの句点のとおりとする。テキストは、いわゆる文法でいう

ところの文の法則、即ち、文末を終止形等で示すという方法に、必ず従っているわけではない。

I ①尊徳翁は余が郷里の人なり。②曾つて之を一父老に聞  
く、われ昔甚だ窮乏せる時金次郎我が為に致富の道を授  
けたるを以て今日の樂境に達したるなりと。③金次郎  
(尊徳翁の実名) 生る、に一塊の領土なく死するにも亦  
た富榮を以て去らざりし。④荒蕪廢滅せる田墟を拓いて  
鋤犁其肩を離れず、其間に窮孤衰老を扶助するが為めに  
寒宵月入つて眠る事を忘れ、其肘裡夙に既に一村の安危  
を負ふ所の者は高く既に一國を負ふの忍耐と局量を備へ  
たり。

II ⑤其終生の事業は、一太夫の家を整へ某々邑の財務に当  
り某藩の問ひに顧みたる等に過ぎず。⑥而して彼が此小  
事に当るを見れば、再三固辞するの後、甚しきは辞する  
事幾有年に互り而して後妻子と離盃を挙げて出づ、辞す  
る時は羊の如く怯にして出る時は蹶然猛獅の奮迅するが  
如し。⑦業に当るや孜孜營々落葉をだも地に委せずと言  
ふ。⑧其野州にあるや同僚の武士彼が匹夫より出で君主  
の拔用する所となるを妬みて百万障碍を試む、而して翁  
の為す所は彼輩が為に特に酒肉を購ひ唯だ沈酔せしめて  
其の際に事業の功を進めたりと言ふ。⑨翁の苦慮察す可

きなり。⑩故小山春山余に語れる事あり、(春山は幼時  
翁に野州に従ひ居たりし人) 翁は書を以て講せず古人に  
随つて遊ばず説くところ談ずるところ一々其胸臆より發  
すと。⑪春山又た駿遠に遊びしことあり該地に於ける報  
徳社なるもの盛況婉然たる一神社にして而して偶像を有  
せざる者なりと。

III ⑫尊徳翁苦学して略ぼ学道に通ずるに至りしかども未だ  
以て儒学の一家を成すに足らざりし。⑬彼深く信仰を抱  
きしかども未だ以て宗教家たるに至らざりし。⑭彼が懷  
抱せし信仰は盖し經典の文字を通じて来たらず、其の真  
摯着実清廉勇猛なる天資が轆轤嶮たる人生の行路に遭  
ひて恰も奇代の名琴が列々たる荒麤に撥かれて自然に逸  
韻妙響を發し、聴かる、事なく称せらる、ことなく自ら  
鳴いて自ら絶えたるが如きなるか。⑮斯くの如きは實に  
天来の朴直なる信仰にあらざるか。⑯釈氏を説かず、神道  
を談ぜざる尊徳翁は堅く天地の善美人心の調和進みては  
人界に天国を來する極意を自信したりし人なり、故に其  
温顔微笑の中に精妙なる真理をあらはし、俚談簡語既に  
人心を矯むる事を得たるなるり、豈炎々たる心中火ある  
にあらざりして能く斯の如きを得んや。⑰彼は自ら信ずる  
の外一点の自らを高むる所あらざりき、英雄を夢み、講  
壇を想ひ邦土を欲し、声誉を希ふの徒は翁の眼前に局促



たる江舸の如し、昨日凍飢に瀕したる小民の今日綿衣を着くるを見る時に翁は滴腔の涙を灑ぎて感謝したるなり、神を知らざる世と言ふ勿れ、翁の如きは感謝す可き目的物を信じ居たるは明らかなり。⑱死者を送る翁は天国に帰る人を歓送する今日の牧師に譲らざりし生者を撫育せんとするの熱情も安んぞ今日の宗教家に遜る所あらん。⑲一言之を尽さば、翁は希代の理財家にして而して独特の大信仰を有し天来の心内生（イノチノウマ）によりて終生を犠牲的に職事したる人傑なり。⑳彼の英国の奇俊ジョルヂ、フオツクス、を激称せしサルタ、レザルタスの記者今日若し有らば必ず疾呼して尊徳翁を英雄の一人に数ふるなる可し。㉑預言者の故郷に於けるが如く余が郷翁を出して翁を知る者甚だ稀に僅に福住正兄の書せる小伝の少数の読者を得たりしのみなりき。㉒然るに囚らずも昭代明君の鑒識に會ひ一匹夫に生れ一匹夫に終りたる二宮尊徳翁過ぬる年には講話の遺存せる者を乙夜の覽に供し奉り、過日再び君恩の優渥なる階位を賜ふ、從四位甚だ尊からず、唯だ草莽の一田翁斯くまで高願を受くるを見ては吾人誰か感涙に咽ばざる者あらん、今日の政界に小名譽を弄し温袍を着美酒を貪り花顔を蓄へ以て田夫野人に誇負せんとする者須らく慚死す可し、区々たる議士の榮達を以て脾肉の満肥するを覚ゆるの輩、重箱の隅に食を争ふ猾鼠の

徒須らく愧死して再活す可し。㉓知らず尊徳翁余が蕪言を草葉の陰に容る、や否や。

右の文章について（文章）とは、ひとつの作品の全体を、ことばの単位の一つとして認定する、という文法観にもとづいて（いる）、基本的な文型の類型を中心としてその有機的な機能を考えるところという方法によって文章の構造を研究する。この方法では、段落という、一つの単位を越えて、一つの単位である文章全体の中の（文章）の役割を考えようとする。

文章研究は、その構成要素の一つである（文章）の役割を考えることも、ひとつの有効な研究方法である。永尾章曹は、ことばの単位として存在する（文章）を、構成する要素としての（文章）の研究によって、（文章）には基本的類型があることを確認された。次のように概説してある。

こうして、文は、文章の構成要素として、その文章の中での役割に応じて、一定の形式を持つものであることが確かめられたようである。第一に、「固有名詞・代名詞十は十名詞十である（形容詞）」は、文章の全体について、それが何時のことであるか、また、話の筋の展開のどこかについて、それがどのようなものであるか等、話し手がことを定めるといふ点で特徴的である。こうし



の文型を挙げてみよう。それは、次の二文である。

文① 尊徳翁は郷里の人なり。(固有名詞＋は＋名詞＋である)の形

文② 翁は人傑なり。(代名詞的用法の普通名詞＋は＋名詞＋である)の形

文①について考えてみる。文章の冒頭である第一文において、「尊徳翁」は、「郷里の人」であると、書き手によつて特定されたことを述べている。これは、文章の全体について、波及しているという特徴がある。文①は、第一段落ばかりではなく第二・第三段落にもこのことは影響している。第一段落では、文②の、「一父老」は、文①の「郷里の人」を、直接に受けた人である。第二段落では、「小山春山」という名前の人である。括弧内に、「幼児翁に野州に従ひ居たりし人」と記されていることから読み取れる。第三段落では、文②の、「預言者の故郷に於けるが如く余が郷翁を出して翁を知る者甚だ稀に僅に福住正兄の書せる小伝の少数の読者を得たりしのみなりき」の一文の中に、「余が郷」と記載されている。また、「福住正兄」は、『二宮翁夜話』の著者で、郷里小田原の人である。透谷は、二宮尊徳を、同郷の偉人である、という視点によつて論じようとかんがえたのである。

次に、文②について考えてみる。文②は、文章の中で、終りに近い部分にある。尊徳像を、一言で言い表した文である。

「翁」という普通名詞は、ここでは、例えば、文③で用いているように「彼」としてもよいような用法である。「翁」は、「人傑」である、と言う。「人傑」という語の内容は、文④でも、別の側面から述べている。つまり、本稿の前半部分で述べたとおり、カーライルの定義による「英雄」に他ならない。文⑤は、『二宮尊徳翁』の、文章全体の統合点の役割をもっているとかんがえる。

⑤ 一言之を尽さば、翁は希代の理財家にして而して独特の大信仰を有し天来の心内生によりて終生を犠牲的に職事したる人傑なり。

文⑥が統合点であることを、順をおつて具体的に叙述してみよう。文⑥では、尊徳翁について「理財家」であることと「大信仰」を所有していたことを、「人傑」であることの要素である、と述べている。

「理財家」としての尊徳については、二つの面から記されている。一つは労働に精根を傾けることと、もう一つは財務を管理することである。労働については、第一段落の実例と、これに続く透谷の論がある。文②は、郷里の一父老から透谷自身が、直接に聞いた話である。「致富の道を授けられ今日

日の楽境に達した」という。ここに述べる「楽境」は、「甚

だ窮乏」していたことから救われたということである。文③は、この文②を受けて、尊徳自身の例を挙げて「死するにも亦た富栄を以て去らざりし」と述べる。

文④は、尊徳の、労働そのものの裡に込められている精神力を、非常に高く評価する文である。基本的文型は、判断文の類型である。まず、「窮孤衰老を扶助するが爲めに寒宵月入つて眠る事を忘れ」と、労働を続ける姿を言い、次に、「其肘裡夙に既に一村の安危を負ふ所の者は高く既に一国を負ふの忍耐と局量を備へたり」と、その精神力を力説する。「肘裡」に、「一国を負ふの忍耐と局量を備へたり」という。「肘裡」は、暗喩法による表現である。労働をする、その「肘」の中に生きている魂を想像するのである。労働を尊いものであるとする思想は、カーライル思想の特徴である。後年に、表題をそのままの著作も上梓されてもいる。「トマスカーライルと彼が労働の福音」(ウアード著・住谷天来著、警醒社、一九〇九年一月)である。透谷は、カーライルの思想から、労働を尊重すべきものとして認識していたからであるということもあろう。なお、透谷は、「三日幻境(上)」(『女学雑誌』第三二五号、一八九二年八月一三日)で、「衷裡」という通常の用語を用いている用例もある。文③と文④とは、文②の実例を受けて、透谷自身の見解を叙述したのである。文④は、文①・文②・文③等を統合する文である。

文⑦は、第二段落の文脈中の文だが、労働に対する真摯なようすをいう実例である。「文⑦業に当るや孜々営々落葉をだも地に委せずと言ふ」、この一文は、文⑥の末尾へ出る時は蹶然猛獅の奮迅するが如し」という、透谷自身の見解を明喩の形で述べた直後に、その一つの実例として記されたものである。

もう一つの、財務を管理することに関連する透谷の見解を叙述する部分をみよう。第二段落最初の文である。「文⑤其終生の事業は、一太夫の家を整へ某々邑の財務に当り某藩の問ひに顧みたる等に過ぎず」、この文の形は、判断文の類型である。尊徳「終生の事業」として、この文では知恵を用いた仕事を挙げている。「へ」に過ぎず」と、「労働」の評価とは相違して、かなり低い評価である。文⑥の初めのところに、「此小事」という語句があることも文⑤を受けた文であることを示している。

文⑧・文⑨の二文を考えてみよう。「⑧其野州にあるや同僚の武士彼が匹夫より出で君主の抜用する所となるを妬みて百万障碍を試む、而して翁の爲す所は彼輩が爲に特に酒肉を購ひ唯だ沈酔せしめて其の隙に事業の功を進めたりと言ふ。⑨翁の苦慮察す可きなり」。文⑧は、実例として挙げられたものである。「酒肉を購ひ唯だ沈酔せしめて其の隙に事業の功を進めたり」というようなことは、明らかに、尊徳が軽い

気持ちで実行したはずはない。万策尽きて選んだ手段なのである。へ文⑨翁の苦慮察す可きなり」の文型は、判断文の類型である。文⑧の、尊徳の行った行為について説明する、解説表現である。

へ大信仰」という語に関連して叙述している部分をみよう。へ理財家」が、表面に現れている尊徳の業績を指している語であるのに対して、へ大信仰」は、業績をなし遂げた人の、その行動を促した内部からの、へ天来の心内生」という意志の源を表現する語である。明らかに、一般的に、宗教でいう意味の信仰ではない。

第二段落文⑩へ翁は書を以て講ぜず古人に随つて遊ばず説くところ談ずるところ一々其胸臆より発す」は、故小山春山が、透谷に語った話の内容としていわゆる間接話法で記されている。へ胸臆」が、透谷の愛用語の一つであることは、先に触れたことである。尊徳のへ大信仰」は、へ胸臆」からへ発」したものである、という文脈の最初の文である。第三段落の文脈との連繋を読み取れるからである。第三段落の文⑭・文⑮の二文は、明喩法によって、透谷の考えを表現した文である。へ⑭彼が懐抱せし信仰は蓋し經典の文字を通じて来たらず、其の真摯着実清廉勇猛なる天資が軋軋崎嶇たる人生の行路に遭ひて恰も奇代の名琴が列々たる荒麤に撥かれて自然に逸韻妙響を発し、聴かる、事なく称せらる、ことなく

自ら鳴いて自を絶えたるが如きなるか。⑮斯くの如きは実に天来の朴直なる信仰にあらざるか。この二文は、文⑩を説明する内容である。文⑫と文⑬とは、文⑭と文⑮とを叙述する前提条件を述べたものである。文⑯は、へ尊徳翁は人界に天国を来する極意を自信したりし人なり」の部分を見ると、ここに、判断文の類型がある。尊徳のへ大信仰」そのものを、へ人界に天国を来する極意」であるとした透谷の見解である。

文⑩は、文⑧・文⑭・文⑮等を受けて、これらを統合した文である。文⑯末尾へ豈炎々たる火心中火あるにあらずして能く斯くの如きを得んや」の部分は、心中の火を、へ大信仰」の源としている、という比喩表現である。文⑳で、改めて取り上げることにする。

文⑰は、論理的には四文ある形で、一文というよりは、一段落というような形である。文⑰の全文は、へ彼は自ら信ずるの外一点の自らを高むる所あらざりき、英雄を夢み、講壇を想ひ邦土を欲し、声誉を希ふの徒は翁の眼前に局促たる江河の如し、昨日凍飢に瀕したる小民の今日綿衣を着くるを見る時に翁は満腔の涙を灑ぎて感謝したるなり、神を知らざる世と言ふ勿れ、翁の如きは感謝す可き目的物を信じ居たるは明らかなり」と、「二宮尊徳翁」の中でも二番目に長い。これを、便宜のために、四文の形であると仮定して、それぞれ

の表現内容を、分解して述べることにする。

その一へ彼は自ら信ずるの外一点の自らを高むる所あらざりきは、判断文の類型である。文⑩を受けて、文⑬のへ大信仰を、具体的に解説する表現である。その二へ英雄を夢み、講壇を想ひ邦土を欲し、声誉を希ふの徒は翁の眼前に局促たる江舸の如しこの文は、比喻によって、透谷の見解を叙述したもので、尊徳とは、対極にある世俗的な英雄の例を、透谷の考えによつて挙げたものである。その三へ昨日凍飢に瀕したる小民の今日綿衣を着くるを見る時に翁は満腔の涙を灑ぎて感謝したるなりは、尊徳翁のありようを、具体的に実例を挙げて叙述したものである。この具体例は、前例部分と同様に、透谷の考えを具現化したものである。その四へ神を知らざる世と言ふ勿れ、翁の如きは感謝す可き目的物を信じ居たるは明らかなりこの部分は、透谷が考える尊徳翁のへ大信仰のありようを、別の角度から叙述したものである。文⑰は、一括して文⑱を解説する役割で、判断文の類型であるとみなせる。

文⑱は、尊徳のありようを、へ今日の牧師へ今日の宗教家と対比するものである、と叙述したもので、へ大信仰を説明した解説表現である。

以上は、文⑲の、著者透谷が判断文の類型を用いて表現した尊徳像を、文①から文⑱までを統合する文である、という

表現構造を述べたものである。文④と文⑱とは、それぞれの段階における段階的統合点である。

要点をまとめてみよう。へ理財家については、文⑤・文⑥・文⑧・文⑨の部分で、へ大信仰については、文④・文⑥・文⑦・文⑩・文⑭・文⑮・文⑯・文⑰・文⑱の部分で表現されている。へ理財家については、文⑤にへ等に過ぎず、文⑥にへ此の小事」という語句がある。これらは、透谷の評価を述べたことばである。それに比して、へ大信仰は、これを表現する文の数も多く、尊徳の労働を力説することを軸にして、これを非常に高く評価している。

文⑳をみよう。へ彼の英国の奇俊ジョルヂ、フォックス、を激称せしサルタ、レザルタスの記者今日若し有らば必ず疾呼して尊徳翁を英雄の一人に数ふるなる可し。この文は、文⑲で、へ人傑である、という判断を述べた尊徳を、カーライル「サーター・リザータス」でへ激称されてるジョージ・フォックスに比肩する人でもあるとして、尊徳を、カーライルが、定義している意味におけるへ英雄である、と説明する、判断文の類型で解説表現である。

フォックスを英雄である、というにとどまらず、著者カーライルをも、へ英雄である、と、透谷は観ていたのだが、この文章を執筆する時点でも、既に、そう観ていたようである。尊徳像について、先に記した文⑱へ炎々たる心中火ある。

文⑩へ生者を撫育せんとするの熱情等の語句を用いていることから、透谷のカーライル観に共通する観念を読み取れるからである。

「エマルソン」には、透谷が、「サーター・リザータス」を讀んで感動した記憶を記している。へ彼がサルト、レザルタスの中に永遠の否定を論ずる一節を読みし時、余は余が心の頻りに鼓動するを覚えたり、此の偉大なる靈魂が、宇宙と人生とに關する秘密を探りて、遂に永遠の是定を認むるまでの生涯が、如何に慘愴暗黒にして、血汗の全身に循かりしを思ひてなり（第六章エマルソン小論、其六彼の楽天主義、二七五頁）。この文からは、へ血汗の全身に循かりし」というカーライルを想像する透谷の思いを読み取れる。また、同書の中に、へカアライルの猛烈にして熱火の如き声は今や酣に英國を轟かしつ、あり。（同章、其四エマルソンの地位、二七一頁）、へ彼は己れが東道となりて、我土に歓迎したりし「サルト、レザルタス」の熱中したる痛罵と昂揚したる預言者らしき靈声を発すること能はずと雖も、（同章、其五エマルソンの自然教、二七二頁）という箇所にも、へ熱火へ熱中等の語を用いている。

文⑪は、へ預言者の故郷に於けるが如く余が郷翁を出して翁を知る者甚だ稀に福住正兄の書せる小伝の少数の読者を得たりしのみなりき」といふ、國際人としても認められてよい

ような偉人である尊徳が、故郷ではどうか、ということを書いたものである。

へ預言者の故郷に於けるが如くは、『聖書（ルカ伝、四章二四節）のイエス・キリストの言われたことばへ預言者は己が郷にて喜ばるることなし』を用いている。尊徳を知らない人々が多くいるばかりではなく、好まない人もいたらしいことを暗示してもいようか。文⑧の実例に挙げてある尊徳の事業を妨害したへ同僚の武士も、実は、同郷の人なのである。同郷の福住正兄著『二宮尊徳翁夜話』（報徳社、一八八四年）も、へ少数の読者を得たりしのみなりき」といふ、透谷が感じている事例を述べる。この文は、判断文の類型である。

文⑫は、最も長い一文である。文⑬と同様に、一つの段落の形である、と仮定して二つの部分に分けて述べることとする。文⑫の全文は、へ然るに囚らずも昭代明君の鑒識に會ひ一匹夫に生れ一匹夫に終りたる二宮尊徳翁過ぬる年には講話の遺存せる者を乙夜の覽に供し奉り、過日再び君恩の優渥なる階位を賜ふ、從四位甚だ尊からず、唯だ草莽の一田翁斯くまで高願を受くるを見ては吾人誰か感涙に咽はざる者あらん、今日の政界に小名譽を弄し温袍を着美酒を食り花顔を蓄へて田夫野人に誇負せんとする者須らく慚死す可し、区々たる議士の榮達を以て脾肉の満肥するを覚ゆるの輩、重箱の隅に食を争ふ猾鼠の徒須らく愧死して再活す可し。』と、長いば

かりではなく内容も一つに絞ることは無理なものである。

その一へ然るに囚らずも昭代明君の鑒識に会ひ一匹夫に生れ一匹夫に終りたる二宮尊徳翁過ぬる年には講話の遺存せる者を乙夜の覽に供し奉り、過日再び君恩の優渥なる階位を賜ふ、從四位甚だ尊からず、唯だ草莽の一田翁斯くまで高願を受くるを見ては吾人誰か感涙に咽ばざる者あらん」の部分は、論理的には一段落であると認められるようである。

この部分は、更に三つの文を仮定して分けることが可能である。アへ然るに囚らずも昭代明君の鑒識に会ひ一匹夫に生れ一匹夫に終りたる二宮尊徳翁過ぬる年には講話の遺存せる者を乙夜の覽に供し奉り、イへ過日再び君恩の優渥なる階位を賜ふ、ウへ從四位甚だ尊からず、唯だ草莽の一田翁斯くまで高願を受くるを見ては吾人誰か感涙に咽ばざる者あらん」。

ア・イの部分は、事実あった出来事の二例を、述べたものである。へ講話の遺存せる者」は、尊徳随一の高弟・富田高慶の著作「報徳記」(一八五六年一月)を指している。一つは、この書を、明治天皇陛下が、お読みになられたことを述べたのである。もう一つは、尊徳が、一八九一年一月一六日に位階を追贈されたことを述べたのである。ウは、ア・イについての透谷の見解を述べたものである。ウの部分は判断文の類型で、解説表現である。

その二へ今日の政界に小名譽を弄し温袍を着美酒を貪り花顔を蓄へ以て田夫野人に誇負せんとする者須らく慚死す可し、区々たる議士の榮達を以て脾肉の満肥するを覚ゆるの輩、重箱の隅に食を争ふ猾鼠の徒須らく愧死して再活す可し」の部分は、先の文⑰の中に記されていた、世俗的なへ英雄」と同類である。へ須らく慚死す可し、へ須らく愧死し」てへ再活す可し」と、尊徳の対極に位置する人々に対して猛反省を促すことばがある。

へ再活」とは、どういうことか。要するに、恥を自覚して、これを止めて、尊徳のようなへ英雄」としてへ再活」すべきであるという、判断文の類型で、解説表現である。

この述べ方は、後に「内部生命論(一四六頁)」末尾の部分で、より思想的に整理されて述べられることになる。この部分は、「内部生命論」の文章構造の原型である、ともみられる。

インスピレーションを知らざる理想家もあらん、宗教の何たるを確認せざる理想家もあらん、然れども吾人は各種の理想家の中に就きて、斯くの如きインスピレーションを受けたる者を以て最醇最粹のものと信ぜんとするなり。インスピレーションとは何ぞ、必らずしも宗教上の意味にて之を言ふにあらざるなり、一の宗教(組織と



して)あらざるもインスピレーションは之あるなり。一の哲学なきもインスピレーションは之あるなり、必竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるなり。吾人の之を感じるは、電気之感応を感じるが如きなり、斯の感応あらずして、曷んど純聖なる理想家あらんや。

この感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者なり。

右の引用文では、「再造」ではなく、「再造」という語になつてゐる。「人間の内部の生命」を、自らのインスピレーションに從つて「再造」し、これによつて、「純聖なる理想家」として活きることができるといふ論理である。

文②・文③は、総じて言えば、判断文の類型で、解説表現である。書籍・実例等を挙げて尊徳の実像の具体を叙述したり、尊徳の対極の人々を叙述したりしてゐる。

文④、「知らず尊徳翁余が蕪言を草葉の陰に容る、や否や。」は、「二宮尊徳翁」の文章の終りに、筆者としての透谷による謙辞である。この文は、文章全体の中では、異質な文である。

## 五 おわりに

「二宮尊徳翁」の文章構造を中心として、類型として三型ある基本的文型の一つである判断文の形が論旨の軸になつてゐることを叙述した。文章全体の統合点は、文⑩であり、文①から文⑩までは、文⑨を叙述するまでの論理過程を示す表現構造である。文④と文⑥とは、それぞれの過程における段階的統合点である。文②・文④など、文⑨以後の文は、文⑨を解説する表現構造である。したがつて典型的な「評論」の文章の形になつてゐる。

最後に引用した「内部生命論」の用例を用いて換言するならば、透谷は、尊徳を「純聖なる理想家」の一人であり、その理想を労働によつて実行して実現させることが出来た人であると観ていた、といつてもよい。筆者が別稿で既に論じたことなのだが、「二宮尊徳翁」の思想上の背景は、「サーター・リザータス」の農民聖者(a Peasant Saint, p. 182)なのである。

本研究は、透谷が、農民聖者としての尊徳をどのように論じてゐるのか、その論じ方を、文型の役割をかんがへつつ、一文一文を、逐一調べたものである。

〔注〕

- (1) Centenary Edition, the Works of Thomas Carlyle in Thirty volumes, vol. V, London Chapman and Hall, Limited, 1897.
- (2) 拙稿「透谷のカーライル受容——英雄と自然について」(『表現研究』第六八号、一九九八年一〇月)。
- (3) 『北村透谷研究 第四』有精堂、一九九三年四月、二〇二頁。
- (4) 拙稿「北村透谷『夕観』論——その表現を中心に」(『広島女子商短期大学紀要』第八号、一九九七年二月)。
- (5) 『文章表現十二章三省堂、一九八七年四月、第五刷、一五〇—一五二頁。
- (6) 『段落論——文章研究のために——』(『表現研究』第七号、一九六八年二月)。「日本語の文法について」(永尾章曹編著『日本語学』和泉書院、一九九二年五月、初版、一〇三—一三四頁)。
- (7) 同書、一二七—一二八頁。

〔参考文献〕

- 1 時枝誠記『文章研究序説』山田書院、一九六二年二月、再版。
- 2 塚原鉄雄『論理的段落と修辭的段落』(『表現研究』第四号、一九六六年八月)。

〔テキスト〕

・小田切秀雄編『北村透谷集』(『明治文学全集29』筑摩書房、一九八四年

二月、初版第三刷)。

・Thomas Carlyle, *Sartor Resartus*, Centenary Edition, the Works of Thomas Carlyle in Thirty volumes, vol. I, London Chapman and Hall, Limited, 1896.

(なお、漢字は、現行の書体に改めた。ルビは、これを省略し、本稿の論旨に関連している部分だけ、そのまま記した。頁数は、テキストのものである)。

〔引用した英文の翻訳〕

・宇山直亮訳『衣服の哲学』(カーライル撰集・1) 日本教文社、一九六二年五月、初版。  
・入江勇起男訳『英雄と英雄崇拜』(カーライル撰集・2) 日本教文社、一九六二年七月、初版。